

アレルギー性掻痒発生機序の最近の知見
Recent findings on the mechanisms of allergic itch
安東 嗣修¹, 倉石 泰¹ (¹富山大学大学院 応用薬理)

アレルギー性の痒みは、一般に、マスト細胞からのヒスタミンの遊離を介して起こると考えられている。しかしながら、急性蕁麻疹を除き、多くの痒みは抗ヒスタミン薬では十分に抑制できない。我々は皮膚と結膜におけるアレルギー性掻痒のマウスモデルを作出、応用し、アレルギー性の痒み発生機序の解明に取り組んでいる。その成果として、皮膚と結膜のアレルギー性掻痒には IgE のみならず IgG も関与することと、組織により IgE と IgG およびヒスタミンの関与の程度が異なることを見出した。プロテアーゼが痒みを起すし、その機序にはマスト細胞からのヒスタミン遊離を介するものと介さないものがあることが古くから知られていたが、我々は、皮膚と結膜のアレルギー性掻痒へのプロテアーゼの関与が異なることも見出した。皮膚と粘膜（結膜）ではアレルギー性掻痒の発生機序が同一ではないことから、組織別に痒みの治療法を考える必要がある。本講演では、上記の知見について紹介し、皮膚と結膜のアレルギー性掻痒の薬物治療法について考察する。